

想像力の衰退

女生徒の一人が、始業前にやって来て、「母に叱られました。先生ごめんなさい」と泣いて謝る。昨夕、県北の町から車に乗せて帰った部員の一人だ。中国大会の終了が遅くなり、一年生の補助員だけでも先にと連れて帰ったのである。

彼女は帰宅後「先生の車の中でみんなとお菓子を食べた」と話した。すると母親が「先生にもあげたのか」と尋ね、正直に「あげていない」と応えた。すると「それほど心遣いのできない者が部活動しても見込みがない、退部しなさい」と怒ったのだという。もう二〇年も昔の話である。

この母は、人の立場を想像できる子に育てたかったのだ。躰（しつけ）の文字は「身を美しく」と書くが、まさに美しく厳しい躰である。この信念のように、人の立場を想像できるようになるのが、心の成熟の大切な一つであろう。

しかし、今の教育をめぐる環境はこの話とはあまりにもかけ離れていて寂しい。私たちの発言の正しさを誇る人の、何と想像力に欠けていることか。マスコミの報道でさえ、報道される側や背景となる社会構造への想像力を欠き、ひたすら個人攻撃に止まるものが多い。この風潮が改まらないのに、いじめがなくなるだろうか。

詩人の吉野弘氏は「正しいことをいう時は、ひかえめに言うべきだ」と述べている。正しい発言は相手を傷つけるだけでなく、その立場への想像力の不足から出た主張に過ぎぬことが多いからだ。

子どもの「いじめ問題」の背景には、大人社会自体の想像力の衰えがあるのではないか。子どもは大人社会を映す鏡なのだ。



沢田の杖塾 主宰 森 口 章

(二〇〇七年 六月二十一日夕刊掲載)